

注釈

■ 序章 注釈

- 1 原文は附録資料 1 に掲載した。また原文は以下のデータベースから参照可能である。*The Library of Congress Thomas, Congressional Record*, 101st Congress, second session (1990), “A TRIBUTE TO AARCOPLAND (Senate - July 20, 1990),” accessed October 17, 2016, <https://www.congress.gov/congressional-record/archive/>
- 2 原文は以下 (“Aaron Copland is an American institution.”)。
- 3 1945 年にバレエ《アパラチアの春》で〈ピューリッツァー音楽賞〉を受賞した。
- 4 1949 年に映画『女相続人』で〈アカデミー作曲賞〉を受賞した。また以下作品で同賞候補にノミネートされている (映画『廿日鼠と人間』[1939]、映画『我等の町』[1940]、映画『北極星』[1943])。
- 5 1964 年に授与 [民主党ジョンソン政権時]。これは大統領によって受勲者が決定されるもの。他に音楽では、デューク・エリントン、アーヴィング・バーリン [「第二の国歌」《ゴッド・ブレス・アメリカ》の作曲など]、フランク・シナトラ、ボブ・デylan、スティービー・ワンダー、他、が現在までに授与されている。
- 6 1986 年に授与 [共和党レーガン政権時]。これは議会上下両院の決議で受勲者が決定されるもの。自由勲章よりも授与数は少ない。音楽ではアーヴィング・バーリン [1954 年受賞]、ジョージ・ガーシュイン [1985 年]、シンガー・ソングライターのハリー・チェイピン [1986 年]、フランク・シナトラ [1997 年]、そしてコープランドの 5 名が授与されている。
- 7 1951 年と 52 年にチャールズ・エリオット・ノートン詩学教授を勤めた。他に音楽家では、イゴール・ストラヴィンスキー、パウル・ヒンデミット、メキシコの作曲家カルロス・チャベス、レナード・バーンスタイン、ジョン・ケージ、ハービー・ハンコックらが歴任した。
- 8 コープランドの生家は日用雑貨店である (ニューヨーク市ブルックリン区ワシントン通り 628 番地。現在の同地には商業ビルが建っており生家は現存しない)。
- 9 「アメリカの世紀」“The American Century” という標語の端緒は『ライフ』誌の創刊者ヘンリー・ルースが、1941 年 2 月に同誌上に寄せたエッセイの表題にある。この語は真珠湾攻撃の 10 ヶ月前の時期に現れた「その比類ない国力により国際政治の全体的方向性を単独でコントロールするという自信を深め」た当時のアメリカによる、伝統的孤立主義から「介入的な国際主義への対外政策」への転換と、「その必要性を強く打ち出すマニフェスト」である [古矢旬『アメリカニズム：「普遍国家」のナショナリズム』東京：東京大学出版会、2002 年、292 頁。]。

10 オペラ《入札地》以外のここに挙げられた作品は、すべて1930年代後半から40年代にかけて作曲されたものである。

11 引用中にみる以降の「…」はすべて原文ママ。

12 原文は以下（“‘Coplandesque’ music”）。

13 訳では「今もなお」の反復が以下につづくが、これは原文の“still”の反復を逐語的に反映したものの。

14 原文は以下（“That is Aaron Copland’s timeless music. And that is still America.”）。

15 原文は以下（“For us, Aaron Copland will always be the voice of all generations in America.”）。

16 *HPAC*, 215 (“Dean of American Music”); *GMAS*, 234. (“Dean of American Music Composers”).

17 James C. McKinley Jr. “Musical Titan Honors His Heroes” *The New York Times*, (August 18, 2011).
なお、これは彫像設置が計画された3人、つまり、他に指揮者のセルゲイ・クーセヴィツキーとレナード・バーンスタインのうちで最初に着手して完成したものであった。

18 *NLCO*, p. 501 (“the National Cattleman’s Beef Association’s ‘Beef. It’s What’s For Dinner’ campaign.”). バレエ《ロデオ》の中の〈ホー・ダウン〉(Hoe-Down)が使用されている。

19 John A. Lomax and Alan Lomax, *Our Singing Country : Folk Songs and Ballads*, (Mineora, New York : Dover Publications, 1941), pp.54-55.

20 *NLCO*, p. 501.

21 *ECAC*., pp.411-412.

22 *HPAC*., p.362 (ローリング・ストーンズにおいてはCD『ラブ・ユー・ライブ』(初盤発売 [LP] 1977年)の1曲目に、コープランドの“Fanfare for The Common Man” [邦題：庶民のためのファンファーレ]が収録されている。

23 *NLCO*., p. 501.

24 *ECAC*., p.440.

25 *Ibid.*, p.439.

26 本論では「芸術」を「藝術」と表記するが、その論拠は今道の論考に拠る(今道友信『美について』東京：講談社現代新書、1973年、5～6頁、75～76頁)。なお、「東京芸術大学」は、その法人登録上の表記に従った。また、今日の美学的議論に基づけば、本論が含意するような「それ」ならば、むしろ「アート」と言うべきとする立場もあろう。本論では、しかし、そこにこそ、なるべく適切な日本語を使用したいという企図があることに加え、今日にまで到る「藝術」の、その歴史的経緯をふまえる意味で、ここでは記号としての「藝術」の語を用い、そこに西欧近代から日本の現代までの議論の全体を託してこれを使用することにしたい。

27 なお、コープランドとはほぼ同世代のわが国の作曲家としては、近衛秀麿(1898-1973)、下総坑一(1898-1962)、諸井三郎(1903-1977)、池内友次郎(1906-1991)、長谷川良夫(1907-1981)らが挙げられる。一方、滝廉太郎(1879-1903)、山田耕筰(1886-1965)は一世代上であり、石桁真礼生(1915-1996)、松本民之助(1914-2004)、黛敏郎(1929-1997)、武満徹(1930-1996)らは、ほぼ一世代下となる。

28 大橋洋一「訳者あとがき」、フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識：社会的象徴行為としての物語』大橋洋一、木村茂雄、太田耕人訳、東京：平凡社、1981年=1989年、393ページ。

29 アメリカ史学研究の分野における「現代アメリカ」の語の示すところは、本序論の後に詳述する。

30 *PUNS.*, p. 20 [邦訳 22 頁。]

31 「顧みれば、八〇年代のはじまりに、次の十年間の批評動向を確実に予告している書物が出そろっていたことになる。そして新たな批評動向とは、つまり、[イギリスにおける] マルクス主義批評の爆発的といってもいい復活と、そしてアメリカの(グリーンブラットを領袖とする)新歴史主義の抬頭だった。八〇年代の批評は、これに七〇年代から盛り上がりをもせたフェミニズム批評を加えて、文学作品の形式を内在的に批評する広義の形式主義から、社会的政治的批評へと大きく転換していく」(大橋洋一「訳者あとがき」、ジェイムソン『政治的無意識』、390 頁。)

32 ここでの「歴史化」とは、考察対象を、それが存在した時代的、地域的、政治的コンテクストを含めて考察することを示唆する。これはフレドリック・ジェイムソンによる有名な以下の言及と同義に使用したものである。「つねに歴史化せよ！」(Always historicize!) [*PUNS.*, p. 9 [邦訳 9 頁。]]。

33 ロラン・バルト「作者の死」、『物語の構造分析』花輪光訳、東京：みすず書房、1968年=1979年、85～86頁。

34 文化批評における〈テキスト〉の概念については本論文第1章に後述する。

35 モーリス・メルロ＝ポンティ「見えるもの－見えないもの」、『見えるものと見えないもの』滝浦静雄、木田元訳、東京：みすず書房、1960年=1989年、360頁(「すべての見えるものは、一、図と同じような意味では見えることのない地を含んでおり」)。

36 ルイ・アルチュセール『国家とイデオロギー装置』西川長夫訳、東京：福村出版、1975年。

37 *PUNS.*, pp.47-49 (邦訳、55～57頁)。

38 ロラン・バルト「作者の死」及び「作品からテキストへ」『物語の構造分析』、79～105頁。

39 福中冬子編・訳『ニュー・ミュージコロジー：音楽作品を「読む」批評理論』東京：慶応義塾大学出版会、2013年、viii頁。

40 富山太佳夫「テキスト」、『岩波哲学・思想事典』東京：岩波書店、1998年、1117頁。

41 ジョゼフ・チルダーズ、ゲーリー・ヘンツィ編「UNDECIDABILITY 決定不能性」『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』杉野健太郎ら訳、東京：松柏社、1995年=1998年、410～411頁。

- 42 *PUNS*, p. 21 [邦訳 23 頁.] .
- 43 バルト『物語の構造分析』、79～105 頁。
- 44 ジョゼフ・チルダースら 「TEXT テクスト」『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』、p.399。
- 45 E・T・A・ホフマン 「ベートーヴェン・第五交響曲」『無限への憧憬—ドイツ・ロマン派の思想と芸術』鈴木潔訳、東京：国書刊行会、1984 年、350 頁 [「音楽は人間に未知の国を開いて見せてくれる。そこは人間をとりまく外部の感覚世界とはいささかの共通点もない世界で、人間は言葉で説明できる感情を棄て去って、名伏しがたいものに帰依する」]。
- 46 「無意」とは、「故意でないこと。また、意志を持たないこと」である (広辞苑第五版、2587 頁)。
- 47 クロード・レヴィ=ストロース「第 5 部 カデュヴェオ族」『悲しき熱帯 I』川田順造訳、東京：中央公論新社(中公クラシックス)、1955 年=2001 年、329～339 頁 (「顔面装飾は、或る社会学的機能をもっているのである」335 頁。)
- 48 *PUNS*, p. 30 [邦訳 34 頁.] .
- 49 *PUNS*, pp.47-49 (邦訳、55～57 頁)。
- 50 *Ibid.*, p. 89 [邦訳 107 頁.] .
- 51 カール・マルクス『経済学批判』武田隆夫、遠藤湘吉、大内力、加藤俊彦訳、東京：岩波文庫(白 125-0)、1934 年=1956 年、13 頁。
- 52 今村仁司「新版序論 アルチュセールのアクチュアリティ」『アルチュセールの思想：歴史と認識』東京：講談社学術文庫、1993 年、47 頁。
- 53 同前、今村。
- 54 大橋洋一ら「キー・コンセプト集、『形式のイデオロギー』」ジェイムソン『政治的無意識』、400 頁 [邦訳に収録された訳者らによる巻末資料から]。
- 55 *PUNS*, p. 141 [邦訳 172 頁.]
- 56 ルイ・アルチュセール、エチエンヌ・バリバル「IX マルクスによる絶大な理論革命」、『資本論を読む』権寧、神戸仁彦訳、東京：合同出版、1965 年=1974 年、269～270 頁； *PUNS*, pp.23-25 (邦訳、26～27 頁)。
- 57 アルチュセール、バリバル『資本論を読む』、271-273 頁。 *PUNS*, p.24-25 (邦訳、27 頁)。
- 58 *PUNS*, p.24 (邦訳、27 頁)。アルチュセール、バリバル『資本論を読む』、273 頁。

- 59 ウィリアム・C・ダウリング『ジェイムスン、アルチュセール、マルクス：「政治的無意識」入門講座』辻麻子訳、東京：未来社、1984年=1993年、85～86頁。
- 60 富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』、363頁。
- 61 同前、富山、362頁。
- 62 ジョゼフ・チルダーズ、ゲーリー・ヘンツィ編「HISTORICISM 歴史主義」『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』、205頁。本論での「歴史化」とは、「芸術作品がなんらかの超越的で永遠の価値体系によってではなく、その文化的・歴史的コンテクストによって」理解しようとする方途を示す。
- 63 丹治愛『批評理論』東京：講談社選書メチエ、2003年、109頁。
- 64 *HPAC*, p.x.
- 65 ニコラス・クック「音楽的意味の理論化」福中冬子編・訳『ニュー・ミュージコロジー：音楽作品を「読む」批評理論』、343～385頁。
- 66 David Bordwell, Janet Staiger, Kristin Thompson, *The Classical Hollywood Cinema : Film Style & Mode of Production to 1960* (London : Routledge, 1985).
- 67 加藤幹郎『映画ジャンル論：ハリウッド的快樂のスタイル』東京：平凡社、1996年、11頁〔「してみれば映画を一本の閉じられた作品として享受する従来の審美的、作家主義的アプローチは、もはやハリウッド映画を論ずる上でなんの有効性もちえなことになる」〕
- 68 畑中佳樹「ハリウッド・システムと映画監督たち」、『アメリカの文化』、121～127頁。
- 69 Roy.M.Prendergast, *Film Music : a Neglected Art*, (1st ed., New York, 1977) 2nd ed. New York : W・W・Norton & Company, 1992, pp.30-31; なお、同書37頁の“Figure 1”に「1930年代から40年代における典型的なハリウッドスタジオでの音楽課の組織図」が掲載されている。
- 70 *C&PI*, p.297〔「彼〔マイルストーン監督〕は、私が良しとすることを行なうのを望んだし、私に、通常なされるような『アドバイス』を一切しなかった。「音楽監督さえも私のやり方を邪魔しなかった」〕。
- 71 ジェイムズ・モナコ『映画の教科書：どのように映画を読むか』岩本憲児、内山一樹、杉山昭夫、宮本高晴ら訳、東京：フィルム・アート社、1981年=1993年、246頁。
- 72 *HPAC*, p.338〔「映画『都市』はニューヨークの知識人達の理想と態度を具体化したものである。コーブランドはニューヨークの知識人における音楽的主要人物であった」〕。
- 73 佐藤武嗣「日米のゆくえ：首脳会談を終えて(上)」『朝日新聞』、2015年5月2日、日刊、14版、1面。
- 74 日米関係の重要性はいわずもがなであり、ここであえて論拠を挙げるまでもないが、その一例としては、たとえば国内における今日的な〈保守〉の立場からの以下が挙げられる。佐伯啓思『自由と民主主義をもうやめる』東京：幻冬舎新書、2008年、19～20頁。

- 75 国立音楽大学音楽研究所「2015年度 20世紀前半アメリカ音楽研究部門〈ガーシュイン・プロジェクト〉」, accessed October 5, 2015. [以下のweb ページ内の「趣旨」より]。
<http://www.kunitachi.ac.jp/organization/research/gershwin/gershwin.html>
- 76 イマヌエル・カント『純粹理性批判(上)』原佑訳、東京：平凡社、1787年=2005年、145～234頁。
- 77 *ProQuest Dissertation Express*, accessed May 31, 2015,
<http://disexpress.umi.com/dxweb/> [“Serch term”に年号, “Title”に“Aaron Copland”で検索した]
- 78 専門書及び紀要や専門雑誌における学術論文を含め、管見では、国内のコーブランド関連の研究論文は、以下以外を見出すことができない(佐竹由美「アーロン・コーブランドの《エミリー・ディキンソンの12の詩》:『アメリカ的』なるものの考察と作品分析」博士学位論文、東京藝術大学、2008年)。
- 79 本論第1章ではそのうちの2つを紹介する。
- 80 YAMAHA music pal 学校音楽教育支援サイト「20世紀音楽の流れ – その作曲家たち」, accessed October 5, 2015. http://jp.yamaha.com/services/teachers/music_pal/study/history/modern/p5/
[「最もアメリカ的な作曲家とされるコーブランド (A. Copland, 1900-90)」]。
- 81 本間長世編『現代アメリカの出現』東京：東京大学出版会、1988年。本間長世、亀井俊介、新川健三郎編『現代アメリカ像の再構築：政治と文化の現代史』東京：東京大学出版会、1990年。
- 82 本間『現代アメリカの出現』p.ii.
- 83 有賀夏紀『アメリカの20世紀・上』、3-4頁。
- 84 有賀貞『アメリカ史概説』東京：東京大学出版会、1987年、40頁。
- 85 中野耕太郎「アメリカ『現代史』の起点を求めて」、『歴史評論』、48頁。
- 86 有賀夏紀『アメリカの20世紀・上』、64頁。
- 87 この引用は以下から(中野耕太郎「アメリカの世紀の始動」、山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『現代の起点：第一次世界大戦・4遺産』東京：岩波書店、2014年、223頁)。「アメリカの世紀」の語については、本序章の注9を参照のこと。
- 88 佐伯啓思『自由と民主主義をもうやめる』東京：幻冬舎新書、2008年。佐伯は、現代の国内において、反米保守の論陣を張る主要な論客といえる。
- 89 同前、佐伯、15頁(「『革新』や『進歩』を唱えていた『左翼』」)。
- 90 同前、佐伯、22頁。

- 91 徳永恂「保守主義」、『社会学事典』東京：弘文堂、1988年、812頁。
- 92 ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』有賀貞訳、東京：講談社学術文庫、1955年=1994年。
- 93 小川仁志『アメリカを動かす思想：プラグマティズム入門』東京：講談社新書、2012年、18～20頁。
なお、佐伯啓思『自由と民主主義をもうやめる』もまた、現状の日本において、構造改革を推進する立場を〈保守〉とするのはアメリカ的〈保守〉概念の受け売りとして述べる。一方、〈革新〉が護憲や公教育のあり方を擁護するのは、〈戦後民主主義〉の理念を追求し擁護する結果であるとされる。
- 94 森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』東京：講談社選書メチエ、1996年、68頁。
- 95 飯山雅史『アメリカの宗教右派』東京：中公新書ラクレ、2008年、32～33頁。

■ 第1章注釈 コープランドを「歴史化」する

¹ ここでの「歴史化」とは、考察対象を、それが存在した時代的、地域的、政治的コンテクストを含めて考察することを示唆する。これはフレドリック・ジェイムソンによる有名な以下の言及と同義に使用したものである。「つねに歴史化せよ！」(Always historicize!) [PUNS., p. 9 [邦訳 9頁。]]。

² Alex Ross, *The Rest is Noise : Listening to the Twentieth Century* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 2007) (邦訳：アレックス・ロス 『20世紀を語る音楽 I』柿沼敏江訳、東京：みすず書房、2007年=2010年)。また、本論略記 *GJAC* (邦訳：ゲイル・レヴィン、ジュディス・ティック『アーロン・コープランドのアメリカ』奥田恵二訳、東京：東信堂、2000年=2003年)。これら二つの訳書は、近年の研究成果が反映されており、歴史化されたコープランド像を知る上で挙げられるべきである。他方、ウィリアム・W. オースティンが執筆し奥田恵二が翻訳した邦訳『ニューグローブ世界音楽大事典』(1980年=1995年)の「コープランド、アーロン」の項では、コープランドの生涯は楽壇との関わりにおいてのみ記述されていて十分に歴史化されていない。また奥田恵二の著作(『「アメリカ音楽」の誕生：社会・文化の中で』東京：河出書房新社、2005年。)では、その一部で、コープランドが取り上げられているが、やはり音楽的モダニズムやアメリカン・ルーツミュージックとの関連のなかでコープランドが論じられており十分な歴史化は行なわれていない。なお、該当研究でのコープランドの伝記的記述については、ハワード・ポラック(本論略記 HPAC)や、コープランドとヴィヴィアン・ペルリスによる共著自伝(本論略記 C&P-I, C&P-II)が基本的に参照される(これらは未邦訳)。

³ この著作は、アレックス・ロスによる20世紀音楽の評論集であり、そのうちの一つがコープランドに関する記述として収録されている。ただし、ロスによるコープランド受容像は〈ニューディール政策〉と強く結